

# 国民性に関する意識動向継続(2013 年度)調査 の主な結果

統計数理研究所 調査科学研究センター

(文責：准教授 前田忠彦)

## ■調査目的■

2012 年度 1～2 月に実施した「国民性に関する意識動向(2012 年度)調査」(面接・留置)調査協力者のうち同意の取得された者を対象として、継続調査を実施し、国民性(身近な事柄に関する意見)の安定性、および震災前後の意識や行動についての変化の傾向性などについて検討する。

このパネル調査は当面計 4 回の継続実施を予定しており、東日本大震災を経験した日本人の意識を縦断的に追跡することを通じて、社会に対する評価や人間関係に関する個人の意識の変化メカニズムを検討する資料とする。

## ■調査の設計■

- ・調査名：「国民性に関する意識動向継続 (2013 年度) 調査」
- ・調査対象：2013 年 1 月実施の面接調査・留置調査で継続調査の依頼を許諾した人
- ・調査地域：全国
- ・調査実施方法：郵送調査法
- ・調査実施機関：社団法人 中央調査社
- ・調査実施日：2013 年 12 月 19 日～2 月 14 日
- ・調査対象数：3,019 人 (2012 年度調査で協力依頼を送付可とした 3026 名から、監査葉書による継続拒否者 7 名を除く) "

## ■回収の結果■

- 1) 有効数 (率) : 2,173 人 (72.0%)
- 2) 不能数 (率) : 846 人 (28.0%)
- 3) 不能内訳 :

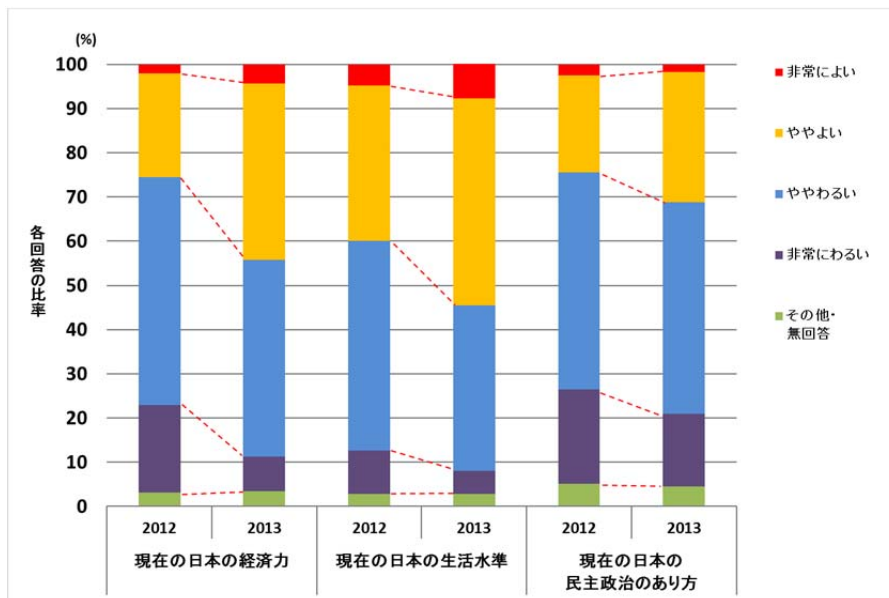
事前拒否による調査票未発送	6 人 ( 0.2%)
転居・住所不明による調査票未着	0 人 ( ー %)
集計後除外 (白票・性年齢不一致)	19 人 ( 0.6%)
調査票未返送	821 人 (27.2%)

## ■主な調査結果■

### ◆新政権発足から1年後、日本の政治・経済への意見が好転

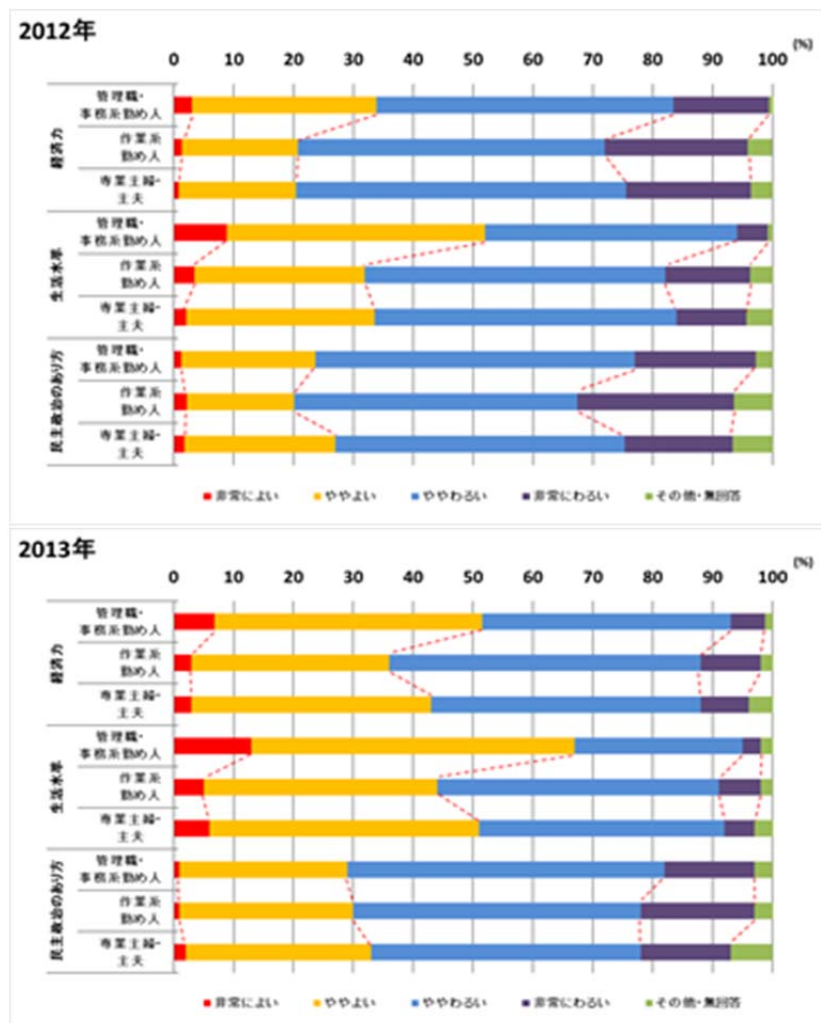
第2次安倍政権発足から約1年がたち、日本の政治・経済に対する意見をおたずねしたところ、2013年では2012年に比べて肯定的な意見をもつ方が増えました。

- 「現在の日本の経済力」について、「非常によい」と「ややよい」を合わせた肯定的な意見の割合は、25%から44%へと上昇しました（図1の赤とオレンジの部分下方に広がっています）。
- 「現在の日本の生活水準」に対して、全体の半数を超える55%の方が「非常によい」または「ややよい」と回答していました。
- 「現在の日本の民主政治のあり方」にかんしても、2012年に比べて「非常にわるい」という意見が減り、その分「ややよい」という意見が増えています。



- ◆日本の現況についての意見は、どの職業でも前年度調査の結果よりも改善  
日本の現況を肯定的に捉えている人は増えたようですが、このことをより詳しく調べるため、代表的な職業に従事する方を対象に図1の結果をまとめ直しました(図2)。
- ▶ 全体的な回答傾向は、2013年になって良い方向へと上昇していました。また、職業ごとの回答には、調査時点間で次のような似通ったパターンが見られました。
- ▶ 「現在の日本の経済力」と「現在の日本の生活水準」についての意見には、職業間で回答傾向に違いが生じていました。「管理職・事務系勤め人」では、「現在の日本の経済力」、「現在の日本の生活水準」を「非常によい」または「ややよい」と肯定的に回答する割合が高い傾向がありました。これに対して「作業系勤め人」では、「ややわるい」もしくは「非常にわるい」と否定的に答える割合が高くなっていました。
- ▶ 職業の違いがもたらす社会的な格差の影響により、回答者の方の日本の現況に対する意見にも差異が生じたのかもしれませんが。

図2 職業別にみた日本の政治・経済の現状についての意見

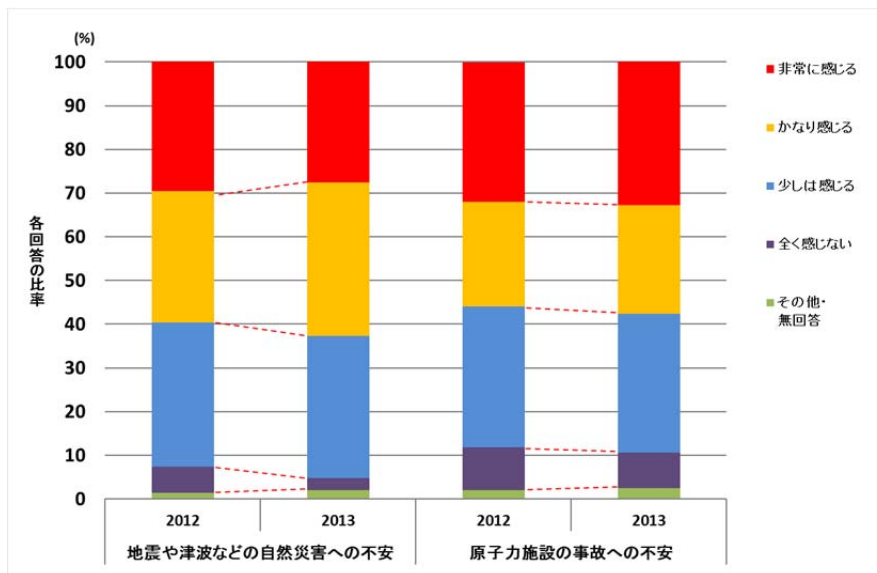


◆災害への不安はやや軽減するも、原子力施設の事故への懸念は続く

東日本大震災から約2年が経過しましたが、その間に自然災害と原子力施設への不安がどのように変化したのか検討してみました。

- ▶ 「地震や津波などの自然災害への不安」は、「非常に感じる」の割合がやや減少しましたが、その一方で「かなり感じる」という回答は増加して全体の35%を占めていました。不安の程度は少し軽減したようですが、依然として自然災害に不安を感じる方は多くいらっしゃるようです。
- ▶ 2012年と2013年の間で「原子力施設の事故への不安」に目立った変化はなく、両時点で「非常に感じる」と「かなり感じる」という回答の合計は半数を超えています。原子力施設への不安は今なお続いていることが、この結果からうかがえます。

図3 自然災害・原子力施設に対する不安感の変化



#### ◆多くの人が現在の自分を幸せだと考える傾向

ここ数年の間に日本では多くの出来事が起こりましたが、そうした状況に対して回答者の皆さんがご自身の現状を幸せと感じているか、それとも不幸せと感じているのかを性別と年代を考慮して検討しました。

- 図4を参照すると、全ての値が「普通」を表す黒い破線よりも上方に位置していることがわかります。これは性別・年代を問わず、ご自身の状況を「不幸」と捉えるよりも「幸せ」と捉えている方々が多いことを意味しています。
- 幸福度の性差を統計学的手法により分析したところ、男性に比べて女性の方がより幸福度が高いということがわかりました。
- 年代別に幸福度の比較をおこなったところ、「30代」の回答者の方の幸福度は「40代」、「50代」、「60代」の方々よりも高いことがわかりました。図4にある緑色の破線を見ると、その違いはわずかであるように思われるかもしれませんが、ここでの差は統計学的に意味のあるものでした。

図4 現在の幸福度についての性・年代別平均値

